

| | |
|--------|-----|
| 都道府県番号 | 38 |
| 都道府県名 | 愛媛県 |

【 】
*重点をおいた観点にチェックすること

学校名及び規模

| | | | | | | |
|-----|-----------|-----|-----|------|-----|-----|
| 学校名 | 御荘町立御荘中学校 | | | | | |
| 学 年 | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 3 | 3 | 3 | 1 | 10 | 22 |
| 生徒数 | 87 | 94 | 87 | 2 | 270 | |

研究の概要

(1) 研究主題

自ら学び、共に高め合う生徒の育成

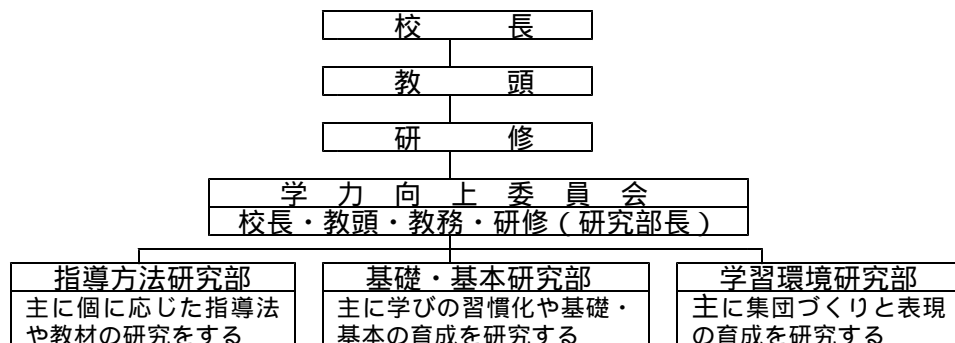
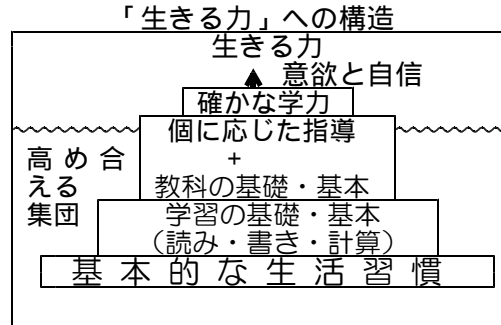
(2) 研究主題設定の趣旨

本校の生徒は全体的に明るく素直であるが、意欲や表現力が不足する傾向にある。また、基本的な生活習慣の定着していない生徒が増えている。そこで、学習の基礎・基本の定着を図るとともに、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を行うことによる「生きる力」をもった生徒を育成できると考え、この主題を設定した。また、真の学力は異なる意見の練り合いから培われるという観点から、集団づくりも研究の柱として設定した。

研究の概要

(1) 研究推進体制の工夫

本校では「生きる力」への構造を右図のように考えている。そのため、研究組織組織では、下図のように3部会を位置づけている。当初、発展的な学習や補充的な学習の研究は、授業の中で行うことを原則としていたため、「学習指導研究部会」に位置づけられていた。しかし、研究が進むにつれて、授業以外でも学校体制で取り組むことになったため、現在は「学習環境部会」に組み込まれている。



(2) 研究の実際

ア 3年生の補充学習の始まり

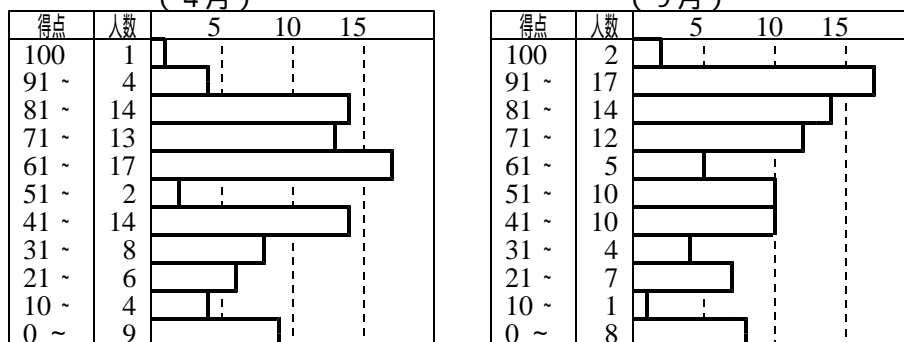
平成14年度を機に、数学科と英語科を中心として、学習形態とそれを生かした指導方法の研究が始まった。各教科共に、教材を工夫し、理解度とアンケートを分析しながら、成果を検証していった。(表1参照)

(表1) 平成14年度の編成 ()内は各コースの平均人数

| | 数 学 科 | 英 語 科 |
|----|-----------------------|------------------|
| 1年 | T・T(週1回) | 1学級2コースの少人数(15名) |
| 2年 | 学年を習熟度別(30名) | 学年を習熟度別(30名) |
| 3年 | 1学級2コースの少人数・習熟度別(15名) | |

数学科において、各テスト結果の分析を続けた。図1はその一例で、4月と9月に行われた学力診断テストの点数を度数分布で表し、比較したものである。その結果、学年全体では理解度が上がっているにもかかわらず、学力の極めて低い生徒は毎回伸びていないこと、授業だけでは個に応じきれていないことがわかった。他教科においても同じ傾向が見られた。

(図1) 学力診断テスト3年数学 度数分布
(4月) (9月)



そこで、平成14年度は3学期から、3年生の対象生徒のみに対して学校体制で補充的な学習を行うことにした。教科は数学のみに絞った。それは、数学が他の教科に比べ、解き方の指導が必要であること、繰り返しや深化が容易で、生徒の成就感を得られやすい、という理由による。

【方法】 本人の意思を確認したうえで、対象生徒12名を選抜。

週3回、放課後30分実施。

3年部や放課後フリーの教師を中心に交代制。毎回4名の教師が指導。

毎回、数学科の教師が6つの分野から6問の問題プリントと教師用の

解答方法を準備。同じ傾向の問題を毎回与え、思考回路の定着を図った。

成果は1週間目から現れてきた。生徒は行き詰まると、すぐに支援を求めたり、わかると次々にプリントに取り組んだりするなど、理解したいという気持ちが前面に出てきた。また、類似問題の反復は、思考方法の定着と計算力の向上に効果があることがわかった。初日、1枚に30分かかっていた生徒が、8分で解答できるようになった。

また、教師も個々の生徒のつまづきを発見し、それに対して手だてをしないまま3年間を過ごさせてしまったことを痛切に反省した。長年の学力不応から生徒指導上の問題を起こす生徒も多かったからである。

イ 「学びの時間」の設定

平成14年度の成果と反省から、数学の支援を目的とした「学びの時間」を設定することになった。これは、全教師が教科の枠を外して、数学の基礎計算力の育成に当たるものである。

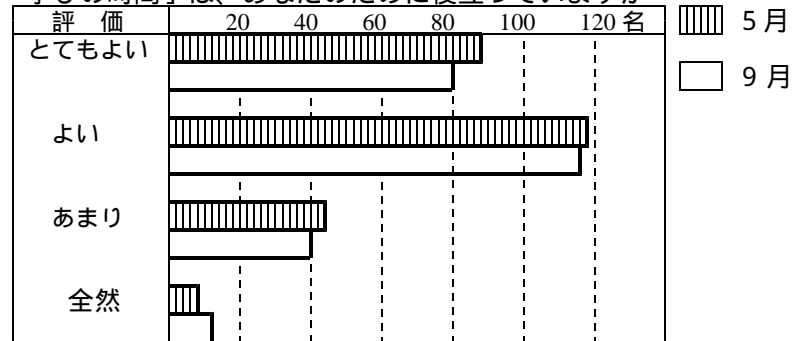
【内容】 時間... 毎週月曜日5校時終了後の30分間(月曜日ができないときは週の初日を短縮授業として、6校時終了後に30分間)

方法... 各学年10人程度を目安に、対象生徒には別室で個別指導を行う。教師3~4人がつくことになる。他の生徒は、自学自習の時間とする。教師は交代しながらつく。

学習... 対象生徒用に数学科が、中学校内容の基本計算ドリルを準備しておく。

次のアンケート結果からもわかるように、「自分を高めるために役立っている」と答えた生徒がとても多い。押しつけでない学習ということもあり、学習態度もほとんどの生徒が「よい」と答えている。「よくない」と答えた生徒にも、この時間の意義を説明し、理解を求めた。また、この時間は多くの保護者に支持されている。しかし、2学期に入るとやや意欲が落ちてきたため、さらに改善することにした。

(図2) 学びの時間アンケート(平成15年5月、9月)
「学びの時間」は、あなたのために役立っていますか



ウ 「学びの時間」の改善

生徒一人一人のつまずきを確認するために、全校生徒を対象に小学校内容の習熟度調査を行った。テストには「陰山・小河式つまずきチェックテスト」を利用した。次に、テスト問題50題を17分野別に分け、個人の分野別習熟度を分析した。「習熟している」という基準は3問中2問正解とした。採点結果を図3のようにチェックシートに記入させて、自分のつまずきを確認させた。

(図3) 個人別習熟度分析

| チェックシート | | 氏名(A) | |
|---------|-------------------------------|---------|------|
| No | 問題 | 演算種類 | 習得学年 |
| 1 | 2635.3652.6352.5623 で3番目に大きい数 | | 2年 x |
| 2 | 364 + 258 + 946 + 872 | たし算 | 2年 |
| 3 | 826 + 987 + 256 + 814 | | 2年 |
| 4 | 521 - 235 | | 2年 x |
| 5 | 2015 - 813 | ひき算 | 2年 x |
| 6 | 4802 - 3395 | | 2年 x |
| 7 | 28700は()の100倍 | | 3年 x |
| 8 | 234の答えは()x4と()x4の和 | | 3年 x |
| 9 | 386 x 473 | | 3年 |
| 10 | 975 x 367 | かけ算 | 3年 x |
| 11 | 691 x 274 | | 3年 x |
| 12 | 1.014 ÷ 2.6 | わり算 | 4年 x |

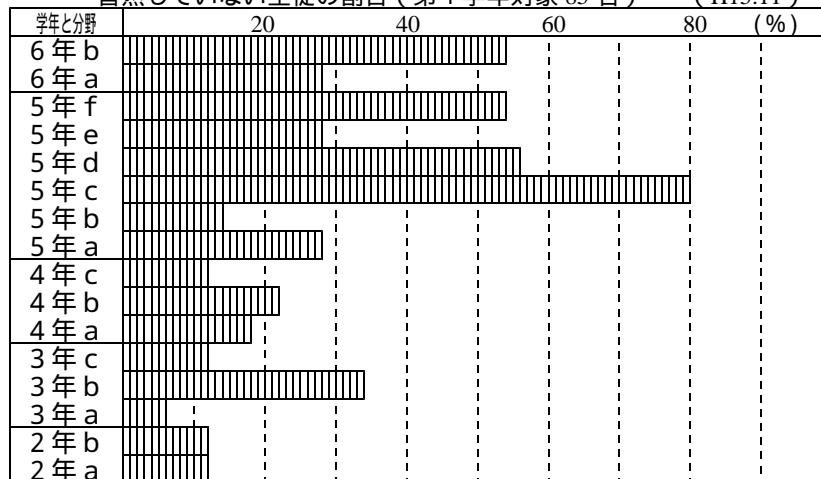
次に、学年全体で分析を行い、次のことがわかった。(図4)

- ・ 各分野平均で4人に1人が習熟していない。
- ・ ほぼ全員が何らかのつまずきを持っている。
- ・ 最も苦手な分野は、単位変換や対比など、中学校理科の計算で必要な資質である。

なかには小2の内容から理解できていない生徒もあり、個々の生徒のつまずきまでさかのぼって支援することの必要性を痛感した。

(図4) 算数の分野別習熟状況

習熟していない生徒の割合(第1学年対象85名) (H15.11)



そこで、数学科の教師が、チェックテストと学力診断テストの結果から総合的に判断し、生徒を次の3つに分け、学級担任は と の生徒に働きかけた。

- 特別な支援がぜひ必要（小学校低学年レベルから習熟不足）
- 特別な支援が一部必要（小学校レベルが部分的に習熟不足）
- 特別な支援を必要としない

3学期からは、次のように改善して取り組み始めている。

[1・2年生]

・ の生徒は特別な支援の教室で学習する。 の生徒には小学校低学年から全学年分を、 の生徒には習熟していない分野の教材を、数学科の教師が準備することにした。

教材は、市販のものを利用し、理解面と計算の速さの両面を育成できるよう工夫して与える。教材の使い方については、数学科の教師が担当者に指導する。

生徒自身が実践内容や自分の変容を自覚することができるように個人カードを作成して持たせることにした。(図5) 楽しく、達成感を味わわせることを第一に取り組んでいる。

3年生に関しては、高校入試に的を絞って、中学校分野の復習に当てることにした。

(図5)個人カード

| 学びの時間 個人カード | | 1/19 | 1/26 |
|-------------|-----|----------------|----------------|
| 整数 | たし算 | 36/36 27/27 | 36/36 |
| | 引き算 | 35/36 27/27 | 35/36 |
| | かけ算 | | 45/45 44/45 |
| | わり算 | | |
| 小数 | たし算 | | |

(3) 研究の成果と課題

ア 小学校レベルまでさかのぼっての取組は、始めたばかりで成果を出す段階ではない。ただ、対象生徒は和気あいあいと目標を持って取り組んでいる。計算も速く正確になりつつあり、以前の半分以下の時間で解けるようになってきている。

イ 課題としては、時間の確保が挙げられる。本年度は創意の時間を利用したため、授業時数や他の方面の時間が不足しがちであった。

(4) 研究成果の普及の方策

ア 学力向上フロンティア事業 地区協議会で、本校の取組を参加者に紹介した。

イ フロンティア通信「あすなる」で、本校の取組を紹介したり、参観日、懇談会等で、保護者に直接説明したりして、理解と協力を呼びかけている。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

| | | | |
|----------------------|---------------------------|----------------------------|-------------------------|
| 【新規校・継続校】 | 1 5年度からの新規校 | 1 4年度からの継続校 | |
| 【学校規模】 | 3学級以下 7～9学級 13～15学級 | 4～6学級 10～12学級 16学級以上 | |
| 【指導体制】 | 少人数指導 その他 | T・Tによる指導 | |
| 【研究教科】 | 国語 外国語 保健体育 | 社会 音楽 その他 | 数学 美術 理科 技術・家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | 有 | 無 | |

【特色ある取組事例として紹介したいポイント(都道府県教育委員会記入)】

- 学力調査により生徒の学習状況を適切に把握し、その結果を検討・分析することにより学習指導の改善点を明確にしている。
- 生徒の学習内容のつまづきを把握し、そのつまづきに応じた支援体制を工夫している。